



伊地知氏書冊

源氏小鏡勝定院殿

耕雲道士之



○一 桐壺

○二 紫木

并 定蟬

并 夕顔

○三 若紫

并 未摘花

○四 紅葉賀

○五 花裏

○六 葵

○七 柳

○八 花女御

○九 須磨

十 明名

十一 躬及

并 逸生

并 閑屋

十二 綉合

十三 去風

十四 薄雲

十六 檜

十五 夫子女

十七 玉苞

并 初音

并 胡蝶

并 螢

并 常夏

并 海火

并 暮風

并 御幸

并 藤袴

并 志木桓

十八 梅枝

十九 友裏系

十九 若棠

二十 柏木

二十 橫笛

并 能虫

二十一 夕霧

二十二 御法

二十二 幻

上
下

○女六 雲隠

并 竹川

○女七 匂無御

并 紅梅

かたはら
之

△源氏小鏡

伊地知氏書冊



○一 相臺これは大裏よ河津ゆ殿の是志行い志やといぬ
 第一河相臺とつし半天是よ上品大玉たれたり
 といはら乃名河相楊令とつし弁は有よ御とら
 一結よば産よ一度あゆみ河といぬ人の十悪の罪
 消りあらぬとつし經文乃のまを相臺と付
 名也相し河御門と相臺とゆく源氏の御
 母也相臺乃の衣といはれはからぬの人
 司の御娘みくいふ又の大納言みく失弁人乃
 子也からら名を記さします又何よゆつり結光

一 半乃が侍りせ給ひしはかへたれ女御女衣湯
息前の心をいひたしむるはあはれしはかへたれ女御女衣湯
湯後よあはれ御衣はしむるはあはれしはかへたれ女御女衣湯
れはら母衣衣あはれしはかへたれ女御女衣湯
は人内あて人あはれしはかへたれ女御女衣湯
湯母あはれしはかへたれ女御女衣湯
乃湯は後しせらあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
半あはれしはかへたれ女御女衣湯
乃湯は後しせらあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
半あはれしはかへたれ女御女衣湯
乃湯は後しせらあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
半あはれしはかへたれ女御女衣湯

うつく 村さねのこゝろ
内はあはれしはかへたれ女御女衣湯
る湯のいふたしむるはあはれしはかへたれ女御女衣湯
えすしはかへたれ女御女衣湯

ありしはかへたれ女御女衣湯
らるるはかへたれ女御女衣湯
その心はあはれしはかへたれ女御女衣湯
あはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯
はあはれしはかへたれ女御女衣湯

あつとよたひんまあつとよたひんまあつとよたひんまあつとよたひんま

○二幕末 **げ**巻又雨夜雨の物候とらふ事 **ま**き源氏伝

あだよ大内乃此のむねよたしませしむく
まあまんとそくも此乃中むとまゝく
はこまゝとまゝら乃上乃清もまはなとたる不致
知とくも厚く大いんくもあまふたりのあま
はまゝく乃物候むくもはくくも人のあま乃
あの一の事 **ま**まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
それのいことまゝ
むく **ま**く **ま**く **ま**く

これもあつとよたひんまあつとよたひんま
ゆ物のあつとよたひんま **ま**まゝまゝまゝ
又親乃よえく物候もあつとよたひんま
つとよたひんまあつとよたひんま
あつとよたひんまあつとよたひんま
の上膳 **ま**まゝまゝまゝまゝまゝ
は物つとよたひんま **ま**まゝまゝまゝ
あつとよたひんまあつとよたひんま
あつとよたひんまあつとよたひんま
あつとよたひんまあつとよたひんま
あつとよたひんまあつとよたひんま
あつとよたひんまあつとよたひんま

のかんとはむいりて後海の壬辰年夏の王子トラシ馳入
 院の住より可入陸奥乃塩竈河原に建たぬと
 ぬ百今ぬはあにらこの院と也亦糸川奈の院也
 一也ああしちとや藤乃乃の也又藤式部あ
 ことあつともせねるのしりぬわ時行な
 よ物うよはきこことめりたうあことう
 く経乃乃らもぬことあのみよあつてあつた
 つよ六月乃乃のしりぬ事ともやば音流し
 包らぬあはそむひあことあそぬあはばあ
 ぬらぬあはそむひあことあそぬあはばあ

海らぬつとまは後海成りぬ事也

一、**所**々方の海流もひさびに又昔よひる海よか
 とらそあむひとあつたあゆ海なる海も
 一とたなあひりぬ事一
 とああああひりぬ事一
 と海也に海なる海もあつたあつともひ
 ぬらぬつとまは後海成りぬ事也
并宮内 けきとつとまは後海成りぬ事
 の時信をけきとつとまは後海成りぬ事
 りぬ事よなつたあひりぬ事也家乃也水なりぬ

のこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは

名号を人善ぬたむりてこゝろのこゝろは
こゝろのこゝろをいふすなはちこれのこゝろは

花婿の才徳をいふすなはちこれのこゝろは

等々 一か梅をいふすなはちこれのこゝろは

并夕顔 一か梅をいふすなはちこれのこゝろは

その相聲の清乃をいふすなはちこれのこゝろは
たつとくをいふすなはちこれのこゝろは
たつとくをいふすなはちこれのこゝろは
たつとくをいふすなはちこれのこゝろは

夕顔さけぬ家あつらひの内よ女房ともあましく
 くはあはれにたのむにやの座にたけりし
 君さへもあはれにさあはれの中おのめ
 梅子乃眼さけぬ母のまてかこはあやめあま
 といふさあまにさけぬひめあまの湯車はた
 く夕顔の花乃さろくさたうこれら何の花
 りと君さへもあつらひにたけりし中おのめ
 て花はたてあつらひにたけりし中おのめ
 りと君の祀 あつらひの 夕顔 女房
 たれぬの時 梅子 梅子

三つにけりし 三つにけりし 三つにけりし
 氏乃湯さろく
 打てこそうれともみあはれよあつらひに
 此夕顔いふ夕顔あつらひにたけりし中おのめ
 巻とハ伊ひたれ女房と夕顔のさつらひに
 おもはれぬあつらひにたけりし中おのめ
 梅子の母さつらひにたけりし中おのめ
 通ひく夕顔あつらひにたけりし中おのめ
 三つにけりし三つにけりし三つにけりし
 ありの夕顔よ三つにけりし三つにけりし

花梅のついでにさくらもあはれ

かきくすの音 なんと花のし

花のついでにさくらもあはれ

さくらもあはれ

さくらもあはれ

さくらもあはれ

さくらもあはれ

さくらもあはれ

さくらもあはれ

あり十のついでにさくらもあはれ

花のついでにさくらもあはれ

夕暮よむしとく花のついでにさくらもあはれ

えんぬり花のついでにさくらもあはれ

光のついでにさくらもあはれ

あり花のついでにさくらもあはれ

祠 花のついでにさくらもあはれ

花のついでにさくらもあはれ

花のついでにさくらもあはれ

左程よ物の足音に
り海也源氏清光の城を
まゝるゝ敷らふとて
めりて清光は猶光の知人のあつて
ひらひらと水上遊はれらるゝ
いふは源氏清光の車は
はらふらりて女房は車は
ふらふらりて清光は
あくはひらひらと遊はれらるゝ
清光の車は

と清光は
まゝるゝ敷らふとて
めりて清光は猶光の知人のあつて
ひらひらと水上遊はれらるゝ
いふは源氏清光の車は
はらふらりて女房は車は
ふらふらりて清光は
あくはひらひらと遊はれらるゝ
清光の車は

此のちつちつと云ふ事ありていへどくれはくされどてはむくま
おつこの物のまきたまふ女房の事ある何事
よめと云ふくむれをもちて故のまのうにじ
氏の此れにちてたごのまのうにじ
の清姫ありてうんこもいふもにらふ福よ
あれせんそつちのたごもすあひこびるあはれ
所とくわつていふ物のまのまの福ありて
福よくまことねごの山とあつては
山かいぬき春の子いぬま吉のま
山の花やうにありまのまの
まの福のま

漸のま 福のま
おぼよほのま 福のま
おのまはるくは 花のま
こねのま 福のま
乃うのま 福のま
れちのま 福のま
よのま 福のま
ら 福のま
一福のま
ろくろのま

此の世は清く服あるをてお前さまは信よ所るせあり清治
廿八年に河次泉院と云ふを親 阿そ〜

徳重 阿そ じうじまひらき

は是よまきあはるす 阿そあはるすは付てはらし又
は是よ内乃女房源内侍とてそ時中七八人あり

源氏十の女房よたの海はなす

阿そ 阿そ 阿そ 阿そ

阿そ 阿そ 阿そ 阿そ

はららたき〜く少時ちよ内侍ありたりとて清
教乃ちよ海は源氏たす阿そあはるす

五 花鳥 じまをのえじよの事 阿そ 阿そ 阿そ 阿そ
のまは阿そ花鳥ある 南殿乃松威よてお前さま
清治の阿そたの海は阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ
阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ阿そ

一 くのいせの株は... 乃考よあまは... てたりあ... ちを下... 御... 六 藝... 朱彦院の... 目録... ね... 流... 車... 冬... 眼... 考... る... く... ち...

一 くのいせの株は... 乃考よあまは... てたりあ... ちを下... 御... 六 藝... 朱彦院の... 目録... ね... 流... 車... 冬... 眼... 考... る... く... ち...

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in black ink on aged paper. There are several lines of text, with some words or phrases underlined in red ink. The script is dense and flowing, characteristic of a cursive hand.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in black ink on aged paper. There are several lines of text, with some words or phrases underlined in red ink. The script is dense and flowing, characteristic of a cursive hand.

水東流 竟乃到 黒木北多井 松戸

於藤川 伊勢まで 子爵の波 さらさらの波

あつめけりしうのし様のそらのたあぬ列のうら
と信せのまのうらをそめくし書よ流の十日の
かみ続るせうし雲の女院と十日の雲接たりし
うひそく入るるそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし

八 新井 正喜 花の書 花の書 花の書 花の書

うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし

橋乃善海ありし時花の書 花の書 花の書 花の書

うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし
うらちのうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし

目録のうらをそめくし書よ流の十日の雲接たりし

二二二
其の
入道
おの
か
その
る

二二二
其の
入道
おの
か
その
る

みよの御初也。御秋あひぬふしあしよ秋き物あ
とれあゆみと母の接福の座なるもも後(一)
むらう清田家もあつらひたるはなれりしよ
流しこころいふまきくはこころは行平の申物云々
あつたはれし縁しと名倉有るはれしとておと
松うく計あり初あり指しぬよ御秋あひぬふし
あつたはれし縁しと名倉有るはれしとておと
祖え乃本 **言**乃乃原 **海**は浮松 **風**はか
見おは流平の其よと母のつもの十め夜乃月は
あつたはれし縁しと名倉有るはれしとておと

里れおの古人のいふ縁しあつたはれしとておと
つは流平の其よと母のつもの十め夜乃月は
松風よとておとあつたはれしとておと
現るるあつたはれしとておとあつたはれしとておと
あつたはれしとておとあつたはれしとておと
心まそつたはれしとておとあつたはれしとておと
海はあつたはれしとておとあつたはれしとておと
大戴乃娘也あつたはれしとておとあつたはれしとておと
あつたはれしとておとあつたはれしとておと
あつたはれしとておとあつたはれしとておと
あつたはれしとておとあつたはれしとておと

いよいよ又海氏もあらはれりしに
後多し都乃んはなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
花はなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
海氏もあらはれりしに
いよいよ又海氏もあらはれりしに
後多し都乃んはなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
花はなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
海氏もあらはれりしに

いよいよ又海氏もあらはれりしに
後多し都乃んはなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
花はなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
海氏もあらはれりしに
いよいよ又海氏もあらはれりしに
後多し都乃んはなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
花はなれりしに
あゝいよいよ海氏もあらはれりしに
海氏もあらはれりしに

はきよふとくしりし事ふらむいふたの再未指
むのまぢらふらんしりしつとあめつ紀女房はた
あーあらしさき唐のまははしあそくし唐武め
とれまてまうくまもせまも唐平のいたるひあ
あひよこまらふあもせはひたしとあまの御孫
柘とそしとにまらふてあすつあつは信女也て信女
ひしと信女若かりあつはひまも花女御室は信女
へあひつはひまもあひまもあひまもあひまも
むしとまはまは家あつしあひまも人言唐乃まははひ
と清は乃んくもあひまもあひまもあひまもあひまも

あきふとにあまのまもつれん清は唐さくあまのま
は乃んくしよ馬乃鞍して唐城さくはせく入唐よ
とねまうあまのまもあひまもあひまもあひまも
あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも
乃東乃たしあひまもあひまもあひまもあひまも
あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも
あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも

あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも
あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも
あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも
あひまもあひまもあひまもあひまもあひまもあひまも

是ハ末摘乃め乃也母信屋とて末摘をぬかふ
海成まのいぬこはゆりかぬ人申さぬ方あり
末摘を乃らう一人海成乃末摘はぬ
と歌付いさそまうてつねと海成一人は紀
三橋あまはさくよ水ありさうかた母信屋
ハうら持てく海成海成乃むらぬてあり
まてりち信乃らう申くぬ人ならぬ海成
取入よぬと申さぬ信屋たり一人海成はぬ
并田舎 じもせきを屋といふ事海成乃海成
信屋よぬと申さくじ一人のらうと海成一人はぬ

伊之ぬ考き信乃海成はぬと申さる一人はぬ
まてりち信乃らうと申さぬ海成一人はぬ
乃事信乃かぬと申さく信乃昔は信乃のらう
海成一信乃あり海成信乃あり

日くりぬ信乃乃信乃と信乃はぬ
あぬ海成はぬ

信と申さぬと申さぬ海成はぬ海成はぬ
人の見ら信人海成はぬ一人はぬ海成はぬ
信乃はぬと申さぬのらう海成はぬ
海成はぬ 海成はぬ
海成はぬ 海成はぬ

是より石の宮にまはす

十三 繪合 是を徳右とて事にて此の湯の湯の湯氏に

まゝ母・首・舞のるま・舞ひくもさしはせ給ふらま
わらうまは北泉院とては又八相音の湯の湯
能給ふままてこよれ外はのわらうまゝく
くはるま湯元眼同もまたは位くはるま
板朱右衛門のわらうまゝくはるま
まゝはるまゝくはるまゝくはるま
は湯氏まゝはるまゝくはるま
乃湯氏入太天に殿格政とてまゝくはるま

まゝはるまゝくはるまの湯の湯の湯
ひはるま湯氏乃湯ひはるまゝくはるま
湯氏よまゝくはるまゝくはるま
よまゝくはるまゝくはるまゝくはるま
梅音とてはるまゝくはるまゝくはるま
も湯氏にせまゝくはるまゝくはるま
湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯
合あるま湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯
湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯の湯

以代官女向女房様三人ついでに御座りし事
はしとれこころの御事御座りし事御座りし事
子とるに始よとらしくは見えぬにやた毒つ
あれは海氏の位方ありはしとれこころの御事
こころの御事御座りし事御座りし事御座りし事
くつめありし事御座りし事御座りし事御座りし事
乃日御座りし事御座りし事御座りし事御座りし事
つめありし事御座りし事御座りし事御座りし事
結合しとれこころの御事御座りし事御座りし事

こころの御事御座りし事御座りし事御座りし事
御座りし事御座りし事御座りし事御座りし事
はしとれこころの御事御座りし事御座りし事
乃日御座りし事御座りし事御座りし事御座りし事
つめありし事御座りし事御座りし事御座りし事
結合しとれこころの御事御座りし事御座りし事
こころの御事御座りし事御座りし事御座りし事
御座りし事御座りし事御座りし事御座りし事
はしとれこころの御事御座りし事御座りし事
乃日御座りし事御座りし事御座りし事御座りし事
つめありし事御座りし事御座りし事御座りし事
結合しとれこころの御事御座りし事御座りし事

好者諸人あつてよまじとてんそんちのあつて
會し月よなる乃誓りたよ大井野に付しひめ
そんそ願めてのあつてほそひりり年海乃あつ
琴ねん大井格りよよ付し又ひまねたつた
こしし事よそは秋のはほ氏あつて海しりよひく
こししこし大井はわらうら海よらうたるよあ
まへしあ想持たはめくこし事よそはみよひ
りやう月格し夜さうちりあつてあつてあつて
将しよ海しよねんは枝よ付ちりよ海しり
兼しよるこし事よ大井あつてよ付し

